

「ヤコブの死とペテロの投獄」

使徒12:1~17

1. はじめに

- (1) アンテオケ教会の成長の記録が一段落し、物語は、エルサレムに戻る。
 - ①ルカは、「イスラエルのメシア拒否」を再確認するためにこの箇所を書いている。
 - ②教会に対するユダヤ人たちの敵対が、第一次伝道旅行の舞台を整えていく。

- (2) 教会に対するユダヤ人たちの態度の変化
 - ①最初は好意的であった。
 - ②ステパノの殉教の死をきっかけに迫害が始まった。
 - ③サウロが迫害の最先鋒となった。
 - ④サウロの回心以降、一時的な平和が訪れた。
 - ⑤しかし、異邦人が教会に加えられて以降、敵対心が増した。
 - ⑥そういう背景の中で、エルサレム教会に再度迫害が襲って来た。
 - *今度は、政治的権力からの迫害が始まった。
 - *ヤコブとペテロは、苦難に会う。

2. アウトライン

- (1) ヤコブの死 (1~2 節)
- (2) ペテロの逮捕 (3~5 節)
- (3) ペテロの解放 (6~11 節)
- (4) 教会の反応 (12~17 節)

結論：なぜヤコブは殺され、ペテロは解放されたのか。

ヤコブの死とペテロの解放について学ぶ。

I. ヤコブの死 (1~2 節)

1. 1 節

Act 12:1 そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、

(1) 「そのころ」

- ①アンテオケ教会がエルサレム教会への義援金を集めていたころのことである。
- ②紀元44年の過越の祭りのころ

(2) 「ヘロデ王」とは、ヘロデ・アグリッパである。

①ヘロデ大王(前37～4)

②息子：ヘロデ・アンティパス(前4～紀元39)

*ガリラヤの国主(ルカ3:1)

③孫：ヘロデ・アグリッパ(紀元37～44)

*ヘロデ大王は、愛妻マリアンメと2人の息子を殺害した。

*2人の息子とは、アリストビュラスとアレキサンデルである。

*アリストビュラスの息子がヘロデ・アグリッパである。

*彼は、ヘロデ大王の時代の領地を支配する王となった。

・ローマ皇帝カリギュラ(ガイウス)と親交があった。

④曾孫：ヘロデ・アグリッパ2世(紀元44～100年頃)

*パウロの裁判を行った(使26章)。

(3) 「教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、」

①ヘロデ・アグリッパは、ポピュリストであった。

②イドマヤ人の血を引いていた彼は、ユダヤ人の歓心を買う必要があった。

③彼は、首都をカイザリヤからエルサレムに移した。

④彼は、使徒たちの迫害に着手した。

*恐らく、サンヘドリンと共謀したのであろう。

*サンヘドリンは、ローマまで行って許可を得なくても、死刑を実行できる。

*これは、教会を抹殺するための最後の手段である。

2. 2節

Act 12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。

(1) 12使徒の中から選ばれたのは、ヨハネの兄ヤコブであった。

①ヤコブは、イエスの3人の内弟子のひとりである。

②使徒の働きの中では、ペテロとパウロが主役である。

(2) 「剣で殺した」

①これは、斬首刑である。

*バプテスマのヨハネも同じ刑に処せられた(マタ14:10)。

②ユダヤ人の死刑法の中では、斬首が最も恵みに富んだものと考えられていた。

*それ以外に、石打の刑、火あぶりの刑、絞首刑などがあった。

③斬首刑は、ヤコブが背教の罪で死刑に処せられたことを示している。

④マコ3:17

Mar 3:17 ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、このふたりにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。

*「雷の子」の中の兄は、使徒たちの最初の殉教者となった。

*弟のヨハネは、長寿を全うする唯一の使徒となる。

II. ペテロの逮捕 (3~5節)

1. 3節

Act 12:3 それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であった。

(1) ユダヤ人たちは、ヤコブの死を喜んだ。

①ユダヤ人たちは、教会に対して敵意を抱くようになっていた。

②ヘロデ・アグリッパは、さらにユダヤ人たちを喜ばせる方法を考えた。

③彼は、ペテロを捕らえることを考えた(大義はある)。

*教会のリーダーである。

*異邦人と親しくした。

(2) 「種なしパンの祝いの時期」

①ペテロを処刑するのに、最もインパクトのある日は、祭りの日である。

*各地から巡礼者のユダヤ人たちがエルサレムに集まってくる。

②種なしパンの祭り=過越の祭り

*過越の祭りは1日、種なしパンの祭りは7日間、合計8日間の祭り。

*ルカは、両方の名称を同じ意味で使用している。

③ペテロは、イエスの受難と同じ道を歩もうとしている。

④ペテロが投獄されるのは、これが3度目である(使4:3、5:18)。

2. 4節

Act 12:4 ヘロデはペテロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。それは、過越の祭りの後に、民の前に引き出す考えであったからである。

(1) この牢は、アントニア要塞の中にあった。

①ヘロデ・アグリッパは、エルサレムに滞在していた。

(2) 彼は、厳重な監視体制を敷いた。

①過去に起こった奇跡的な解放から教訓を学んでいるのである。

*4人一組×4組=16人

*6時間交代、24時間体制で監視

*2人は、鎖でペテロと手をつないで牢の中におり、2人は外にいた。

(3) 過越の祭りが終わると同時に、ペテロの処刑が行われる予定であった。

①ペテロに残されている時間は、少ない。

②ペテロもまた、ヤコブのように殺されるに違いないと誰もが思った。

3. 5節

Act 12:5 こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。

(1) この節には、明確な対比がある。

①ペテロは縛られていた。

②祈りは縛られていない。

*信仰は何ものによっても縛られない。

*キリストにある神の愛から私たちを切り離すものはない。

Ⅲ. ペテロの解放 (6～11節)

1. 6節

Act 12:6 ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。

(1) 祭りの8日目、最後の夜の出来事

①ペテロは、2人の兵士と鎖でつながれ、その間で寝ていた。

②牢の外には、2人の番兵が監視していた。

③ペテロは、ヤコブの殉教の死のことを知っていながら、なぜ安眠できたのか。

④ヨハ21:18～19

Joh 21:18 まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」

Joh 21:19 これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現すかを示して、言われたことであった。こうお話しになってから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」

⑤ペテロは、ヘロデ王が彼を殺すことはできないと確信していた。

⑥ペテロが晩年になるまでには20年前後残されている。

2. 7～8節

Act 12:7 すると突然、主の御使いが現れ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた。

Act 12:8 そして御使いが、「帯を締めて、くつをはきなさい」と言うので、彼はそのとおりにした。すると、「上着を着て、私について来なさい」と言った。

(1) 天使がシャカイナグローリーとともに現れた。

- ① 番兵たちもペテロも眠っていた。
- ② 天使は、ペテロのわき腹をたたいて起した。
- ③ 天使は、短い文章で、次々と指示を出した。

3. 9～10節

Act 12:9 そこで、外に出て、御使いについて行った。彼には御使いのしている事が現実の事だとはわからず、幻を見ているのだと思われた。

Act 12:10 彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりだけで開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた。

(1) ペテロは夢でも見ているような思いになった。

- ① 第一、第二の衛所を通り、鉄の門まで来ると、門は超自然的に開いた。
- ② ひとつの通りに進んだとたんに、天使は消えた。

4. 11節

Act 12:11 そのとき、ペテロは我に返って言った。「今、確かにわかった。主は御使いを遣わして、ヘロデの手から、また、ユダヤ人たちが待ち構えていたすべての災いから、私を救い出してくださったのだ。」

(1) ペテロは我に返った。

- ① 天使が主から遣わされたことが分かった。
- ② それは、ヘロデの手から自分を救い出すためであった。
- ③ 「ユダヤ人たちが待ち構えていたすべての災い」とは、ペテロの処刑である。

(2) ペテロの解放は、ヘロデにとってもユダヤ人たちにとっても打撃であった。

IV. 教会の反応 (12～17節)

1. 12～14節

Act 12:12 こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ

行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。

Act 12:13 彼が入口の戸をたたくと、ロダという女中が応対に出て来た。

Act 12:14 ところが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり門をあけもしないで、奥へ駆け込み、ペテロが門の外に立っていることをみなに知らせた。

(1) ペテロは、至急ヘロデの手から逃れる必要があった。

①その前に、教会の兄弟たちに解放されたことを告げる必要があった。

(2) 「マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家」

①ここでルカは、第一次伝道旅行で活躍するマルコを紹介している。

②マルコは、ギリシア名(マルコス)。

③ヨハネは、ヘブル名(ヨハナン)。

④母マリヤは、裕福な寡婦(召使いがいるのは、裕福なしるしである)である。

⑤この家は、最後の晩餐の席となった場所である。

⑥エルサレム教会で最も重要な集会所であった。

⑦ペテロは迷うことなく、そこに行った。

⑧大ぜいの信者が、ペテロのために祈っていた。

*徹夜祈祷会が開かれていた。

(3) ペテロが入り口の戸をたたくと、ロダという女中が応対に出て来た。

①彼女は、声でペテロが来たことが分かった。

②しかし、門を開けないで奥へ駆け込み、朗報をみなに知らせた。

③ペテロは外に立ったままであった。

2. 15～16節

Act 12:15 彼らは、「あなたは気が狂っているのだ」と言ったが、彼女はほんとうだと言い張った。そこで彼らは、「それは彼の御使いだ」と言っていた。

Act 12:16 しかし、ペテロはたたき続けていた。彼らが門をあけると、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。

(1) 祈っていた人たちは、にわかには信じなかった。

①「あなたは気が変なっているのだ」と言った。

②「それは彼の御使いだ」と言った(当時のユダヤ人の信仰)

*各人には守護天使が付いている。

*守護天使は、守っている人に似ている。

③彼らには、ある種の疑いがあった。

*ヤコブは解放されなかった。

*祈りがこんなに急に聞かれるはずがない。

④ 私たちもまた、不信仰を宿す信仰者、疑いながら祈る者、ではないか。

*彼らを批判するよりも、神の恵みに感謝すべきである。

(2) ペテロは戸を叩き続けた。

① 次第に音が大きくなった。

*近隣の住民は、裕福な祭司階級。教会にとっては危険な人たちである。

*信者が行動を起さないのは、皮肉なことである。

② ついに彼らは、入り口に行き、門を開けた。

③ そして、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。

4. 17 節

Act 12:17 **しかし彼は、手ぶりで彼らを静かにさせ、主がどのようにして牢から救い出してくださったかを、彼らに話して聞かせた。それから、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」と言って、ほかの所へ出て行った。**

(1) 家の中に入ると、ペテロは手ぶりで彼らを静かにさせた。

① 主による救出劇について話して聞かせた。

(2) 「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」

① このヤコブは、主イエスの肉の弟のヤコブである。

② 彼はすでにエルサレム教会の指導者になっていたようである。

(3) 「ほかの所へ出て行った」

① 小アジア? (1 ペテ 1:1)

② シリアのアンテオケ? (ガラ 2:11)

③ 巡回伝道?

結論：なぜヤコブは殺され、ペテロは解放されたのか。

1. 人間的には、答はない。

(1) 人間には、これが最善だという考えがある。

① ペテロが助かったのなら、ヤコブも助けることができたはずだ。

② ヤコブが長生きしたなら、よりよい奉仕ができたはずだ。

(2) 牧会をしていると、死に関する不思議を感じないわけには行かない。

① 信仰とは無関係に、ある人は若くして死に、ある人は長生きする。

(ILL) 高木慶太牧師（1942年～2001年12月）。

*吹田聖書福音教会の創立者

*日本におけるディスペンセーション主義の中心的人物

2. 神の視点から見るしかない。

- (1) 神は、時には不可解に見えるような方法で働かれる。
- (2) 神の性質は不変であるが、神は人間が考える「最善」には縛られてはいない。
- (3) 人生の謎に直面した時には、神の主権を認めるしかない。
- (4) 神の主権を認めた人は、神がすべてを最善に導かれることを信じる。

「ヘロデ王の死」

使徒 12 : 18~25

1. はじめに

- (1) アンテオケ教会の成長の記録が一段落し、12章で、物語はエルサレムに戻る。
 - ①ルカは、「イスラエルのメシア拒否」を再確認するためにこの箇所を書いている。
 - ②教会に対するユダヤ人たちの敵対が、第一次伝道旅行の舞台を整えていく。

- (2) 教会に対するユダヤ人たちの態度は悪化した。
 - ①異邦人が教会に加えられて以降、敵対心が増した。
 - ②そういう背景の中で、エルサレム教会に再度迫害が襲って来た。
 - ③ヘロデ王は、ユダヤ人たちの歓心を買うためにヤコブを殺した。
 - *ヘロデ大王の孫で、ヘロデ・アグリッパ1世である。
 - ④次に、ペテロを逮捕し、種なしパンの祭りの終わりに殺そうと計画した。
 - ⑤しかしペテロは、超自然的に牢から救出された。
 - ⑥ヘロデのその後がどうなったのかを見てみよう。
 - *種を蒔けば、その刈り取りをすることになる。

2. アウトライン

- (1) 番兵たちの処刑 (18~19 節)
- (2) ヘロデの死 (20~23 節)
- (3) 教会成長報告 (24~25 節)

結論 :

- (1) 小さな反キリスト
- (2) 使徒の働きの大きな流れの確認

蒔いた種の刈り取りについて学ぶ。

I. 番兵たちの処刑 (18~19 節)

1. 18 節

Act 12:18 さて、朝になると、ペテロはどうなったのかと、兵士たちの間に大騒ぎが起こった。

- (1) 朝になると、番兵の交代時間になる。
 - ①4人一組の兵士が4組任務に就いていた。

- ②彼らは、6時間交代でペテロの番をしていた。
- ③交代時間になり、ペテロがアントニア要塞の牢から消えていることに気づいた。

(2) 訳文の比較

- 「ペテロはどうなったのかと、兵士たちの間に大騒ぎが起こった」(新改訳)
- 「兵士たちの間で、ペテロはいったいどうなったのだろうと、大騒ぎになった」(新共同訳)
- 「兵卒たちの間に、ペテロはいったいどうなったのだろうと、大へんな騒ぎが起こった」(口語訳)
- 「ペテロは如何にせしとて兵卒の中(うち)の騒(さわぎ)一方ならず」(文語訳)
- 「there was no small stir among the soldiers, what was become of Peter.」(ASV)

(3) ルカは、筆致を抑えることで、逆に兵士たちの動揺の大きさを表現している。

- ①自分たちの命が懸かっているので、動揺するのは当然である。

2. 19節

Act 12:19 ヘロデは彼を捜したが見つけることができないので、番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じ、そして、ユダヤからカイザリヤに下って行って、そこに滞在した。

- (1) ヘロデは、ペテロの捜索に当たった。
 - ①大量の兵士たちを動員し、組織的に捜索を行ったことであろう。
 - ②城門を閉め、エルサレム中を探し回ったことであろう。
 - ③ペテロは、夜が明ける前に町から逃亡していた。
- (2) ヘロデは、番兵たちを取り調べた。
 - ①番兵たちの陰謀がなければ、ペテロが牢から消えることはあり得ない。
 - ②番兵たちを拷問にかけて、自白を強要した。
 - ③しかし、意味のある回答は得られなかった。
 - ④一番の被害者は、番兵たちである。
- (3) ヘロデは、彼らを処刑するように命じた。
 - ①これは、任務遂行に失敗した兵士に対する一般的な処置である。
 - ②ヘロデは、この出来事は神の業ではないと世間に公表しているのである。
 - *彼は、人間の命に対する敬意のかけらも持ち合わせていない。
 - ③番兵たちの処刑をどう考えたらよいのか。

- *これは、ヘロデの罪がもたらした副産物である。
- *これは、より大きな裁きが下る前の前奏曲である。

- (4) ヘロデは、カイザリヤに下って行った。
- ①カイザリヤには彼の王宮があった。
 - ②彼には、解決すべき隣国との外交問題があった。

II. ヘロデ王の死 (20～23 節)

1. 20 節

Act 12:20 さて、ヘロデはツロとシドンの人々に対して強い敵意を抱いていた。そこで彼らはみなでそろって彼をたずね、王の侍従ブラストに取り入って和解を求めた。その地方は王の国から食糧を得ていたからである。

- (1) ヘロデは、ツロとシドンに対して強い敵意を抱いていた。
- ①ツロとシドンは、イスラエルの北に位置するフェニキアの2大都市である。
 - ②怒りの原因は、分からない。
 - ③ヘロデは、ツロとシドンへの輸出を禁止していた。
*特に、食糧輸出が禁止されたのは痛手であった。
- (2) ツロとシドンの人々は、ヘロデとの確執が長期化することを恐れた。
- ①ヘロデは、ローマから絶大な権限を認められていた。
 - ②イスラエルからの穀物輸入がなければ、食糧不足に陥る。
 - ③恐らく、飢饉が始まる兆候が現れ始めていたのであろう。
- (3) 彼らは、ヘロデとの和解を求めた。
- ①彼らは、大規模な使節団をカイザリヤに送った。
 - ②王の侍従ブラストを味方に付けた。
*恐らく、賄賂を贈ったのであろう。

2. 21～22 節

Act 12:21 定められた日に、ヘロデは王服を着けて、王座に着き、彼らに向かって演説を始めた。

Act 12:22 そこで民衆は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。

- (1) 「定められた日」
- ①紀元44年の夏、名目は皇帝クラウデオを称えるためという祭りが開催された。

- ②ツロとシドンの市民たち、カイザリヤの市民たちが、円形劇場に集まった。
- ③祖父のヘロデ大王が建設した建物である。

(2) ヘロデは演説を始めた。

- ①彼は、王服を着けた。

*銀製の王服で、朝日に照らされて見事な輝きを放った(ヨセフス)。

- ②彼は、王座に着いた。

*円形劇場の中央に王座が設けられていた。

- ③彼は、出席していた人たちに向けて演説を始めた。

*今と違って、当時は着座した状態で演説するのが一般的であった。

(3) 聴衆の反応は驚くべきものであった。

- ①ヘロデのスピーチは、確かに力強いものであった。

- ②聴衆は、おべっかを使わざるを得ない状況にあった。

- ③彼らは、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。

「私たちを憐れんでください。これまで私たちは、あなたを人としてのみ敬ってきましたが、これからは、人間以上のお方として崇めます」(ヨセフス)

- ④ヘロデは、この声を叱責することも、制止することもしなかった。

3. 23節

Act 12:23 **するとたちまち、主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫にかまれて息が絶えた。**

(1) 神は直ちに裁きを下された。

- ①「主の使い」とは、激痛のことである。

- ②その理由は、ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。

- ③イザ 42:8

Isa 42:8 わたしは【主】、これがわたしの名。／わたしの栄光を他の者に、／わたしの榮譽を刻んだ像どもに与えはしない。

(2) 「彼は虫にかまれて息が絶えた」

- ①これは、寄生虫(25センチ以上)によって腸壁が食いちぎられることである。

*古代世界では、この死因は珍しくなかった。

*最悪の死因と考えられていた。

- ②ヘロデは円形劇場から王宮に運ばれ、そこで5日間苦しんで死んだ(ヨセフス)。

*54歳で死んだ。

- ③ヘロデの死後、ペリクス、そして、フェストがユダヤ総督になった。
*それに続いて、ヘロデ・アグリッパ2世が王となった。

Ⅲ. 教会成長報告 (24～25 節)

1. 24 節

Act 12:24 主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った。

- (1) 使徒の働きの中に7つの教会成長記録がある。
- ①使 2 : 47、6 : 7、9 : 31、12 : 24、16 : 5、19 : 20、28 : 30～31
 - ②ここは、第4番目の成長記録である。
 - ③ヘロデの迫害によっても、教会は滅びなかった。
- (2) ヘロデの死後、再び伝道の手がやってくる。
- ①紀元44年～47年間までの3年間、教会成長に適した状況が訪れた。
 - ②と同時に、この時期に連続した飢饉が襲って来た。
 - ③エルサレム教会は、最悪の状態に陥っていた可能性があった。
 - ④その時期に、アンテオケ教会からの義援金が届けられた。
*神の先回りの愛があった。

2. 25 節

Act 12:25 任務を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、エルサレムから帰って来た。

- (1) 使 11 : 29～30 とつながっている。

Act 11:29 そこで、弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。

Act 11:30 彼らはそれを実行して、バルナバとサウロの手によって長老たちに送った。

- ①これは、紀元47年の秋であろう。
- (2) マルコがエルサレムからアンテオケに向った。
- ①第一次伝道旅行で彼が登場する。

結論 :

1. 小さな反キリスト

- (1) 1ヨハ2 : 18

1Jn 2:18 小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞き

ていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今が終わりの時であることがわかります。

- ①「終わりの時」とは、神の人類救済計画の最後の段階という意味である。
- ②将来現れる反キリストと、すでに存在している反キリストを区別する必要がある。
 - *反キリストとは、誤った教理を広めている人たちである。
 - *反キリストとは、神に栄光を帰さない人たちである。
- ③多くの反キリストの存在は、今が終わりの時であることを証明している。
- ④正しい教理に留まることができないのは、最初から救われていなかった証拠。

(2) ヘロデ・アグリッパは、小さな反キリストのような存在である(6つのステップ)。

- ①彼は、ヤコブを捕らえ、斬首した。
- ②彼は、ペテロを捕らえ、種なしパンの祭りの最後に殺そうとした。
- ③しかし神は、奇跡的にペテロを救出された。
- ④ヘロデは、この啓示に背を向け、神に栄光を帰すことを拒否した。
 - *自分の兵士たち16人の命を奪った。
- ⑤カイザリヤで神のように振る舞った。
 - *使10:25~26のペテロとは正反対である。

Act 10:25 ペテロが着くと、コルネリオは出迎えて、彼の足もとにひれ伏して拝んだ。

Act 10:26 するとペテロは彼を起こして、「お立ちなさい。私もひとりの人間です」と言った。

- ⑥彼は、最も悲惨な死に方をした。

2. 使徒の働きの大きな流れの確認

(1) 使1:8

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

- ①パート1 エルサレム
- ②パート2 ユダヤサ、マリヤ
- ③パート3 地の果て

(2) 使13章から世界宣教が始まる。

- ①今もそれが続いている。
- ②私たちが、その働きに加えていただく。

「バルナバとサウロの派遣」

使徒 13 : 1～3

1. はじめに

(1) 使徒の働きの3区分

- ①エルサレムでの宣教（使 1 : 1～8 : 4）
- ②ユダヤとサマリヤでの宣教（使 8 : 5～12 : 25）
- ③地の果てまでの宣教（使 13 : 1～28 : 31）

(2) この箇所から、第3の区分が始まる。

- ①地理的には、イスラエルの地を出て、ローマ世界全体に及ぶ。

(3) パウロの伝道旅行

- ①第一次伝道旅行（13 : 1～14 : 28）
- ②第二次伝道旅行（15 : 36～18 : 22）
- ③第三次伝道旅行（18 : 23～21 : 16）

* 「伝道旅行」という名称は出て来ないが、これは学びのために役に立つ。

* アンテオケがこれらの伝道旅行のホームベースである。

* 旅行はアンテオケから始まり、パウロがアンテオケに帰還して終わる。

* 最後の伝道旅行は、パウロがカイザリヤに着いたところで終わる。

* 第一次伝道旅行は、紀元48年春から49年秋まで、約1年半続いた。

2. アウトライン

- (1) アンテオケ教会のリーダーたち（1節）
- (2) 聖霊の語りかけ（2節）
- (3) 宣教師の派遣（3節）

結論：

- (1) 第一次伝道旅行の旅程
- (2) サウロの聖別

バルナバとサウロの派遣について学ぶ。

I. アンテオケ教会のリーダーたち（1節）

Act 13:1 さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。

1. 「さて」(Now)

(1) 紀元48年3月頃。

①バルナバがサウロをタルソからアンテオケに連れてきてから約6年が経過した。

②その間、アンテオケ教会は質量ともに成長した。

*教会成長には、目的がある。

③エルサレム教会は依然として母教会であるが、異邦人伝道の基地となるのは、アンテオケ教会である。

(2) アンテオケ教会では、5人のリーダーたちが共同牧会を行っていた。

①多様な背景を持つリーダーたちが奉仕をしていた。

②この教会は、コスモポリタンの性格を持っていた。

*皮膚の色や出自などは問題ではなかった。

*同じ神を信じていることだけが問題であった。

③ルカは、バルナバとサウロを含め、5人のリーダーたちの名を挙げている。

2. 5人のリーダーたち

(1) **バルナバ**

①キプロス島出身のユダヤ人信者

②ディアスポラのユダヤ人であり、コスモポリタンの人物である。

③彼の名が最初に登場する。エルサレムの母教会から派遣されていたからか。

(2) **ニゲルと呼ばれるシメオン**

①「ニゲル」というラテン語のニックネームは、「肌が黒い人」を意味する。

②彼は、エチオピアからローマ世界に移住したユダヤ人信者である。

③イエスの十字架を担いだクレネ人シモンと同一人物かどうかは、分からない。

(3) **クレネ人ルキオ**

①北アフリカ出身のヘレニストのユダヤ人信者である。

②使11:19~20

Act 11:19 さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかつた。

Act 11:20 ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。

③恐らく彼は、アンテオケで異邦人伝道を最初に始めたひとりであろう。

(4) 国主ヘロデの乳兄弟マナエン

- ①マナエンは、旧約聖書のメナヘム(北王国の王)と同じである。
- ②乳兄弟とは、血縁関係はないが、同じ人の乳で育てられた人同士のことである。
- ③彼は、ヘロデ・アンティパス(ヘロデ大王の息子)と一緒に育てられた。
- ④ルカは、ヘロデ・アンティパスの宮廷内の情報を彼から得たのであろう。
 - *国主ヘロデは、バプテスマのヨハネの首を切った。
 - *また、イエスの裁判では、イエスを侮辱した。
- ⑤同じ環境で育ちながら、ヘロデ・アンティパスはイエスに敵対し、マナエンは初期の教会の指導者のひとりとなった。

(5) サウロ

- ①最後に登場するが、今後彼が主役になって行く。
- ②後の者が先になるという原則が見られる。

3. 預言者や教師

- (1) 預言者はみな教師であるが、教師が預言者とは限らない。
 - ①ギリシア語の「te」(both)が2度入っている。
 - ②「te」バルナバ、シメオン、ルキオ
 - ③「te」マナエン、サウロ
 - ④預言者は3人、教師は2人という解釈が可能である(確定的ではないが)。

II. 聖霊の語りかけ(2節)

Act 13:2 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われた。

1. 語りかけのタイミング

(1) 「彼らが主を礼拝し、断食をしていると」

- ①英語では、「And as they ministered to the Lord, and fasted,」である。
- ②「務めを行う」は、旧約聖書では、聖所における祭司やレビ人の奉仕を指す。
- ③これは、通常の礼拝ではなく、特別な祈祷会であろう。
- ④特別な祈祷会を開催した理由は何か。
 - *5人のリーダーたちは、異邦人伝道に関して真剣に主の御心を求める必要性を感じたのであろう。
 - *断食するのは、より真剣に祈りに専念するためである。

(2) これは、教会全体が集まる祈禱会であったと思われる。

①主からの語りかけは、教会全体に影響を及ぼす。

2. 語りかけの内容

(1) 聖霊が、預言者のひとりを通して語られたのであろう。

①聖霊が人格を持ったお方であることが強調されている。

②初期の教会における聖霊の導きは、顕著であった。

*新約聖書は未完であった。

③リーダーたちも、聖霊の導きに敏感であろうとした。

(2) 「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」

①バルナバとサウロが指名された。

*2人一組で働くという原則が生きている。

②サウロは、すでに召しを受けていた。

③使9:15~16

Act 9:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

Act 9:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

Ⅲ. 宣教師の派遣 (3節)

Act 13:3 そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。

1. バルナバとサウロは、正式に宣教師としての任命を受けた。

(1) 3人のリーダーたちが、断食と祈りをして、ふたりに按手した。

①ふたりは、アンテオケ教会から正式に宣教師として派遣された。

②アンテオケ教会には、祈りと経済的支援によって、彼らを支える責務がある。

③ふたりには、教会に帰還し、宣教報告をする義務がある。

(2) このふたりを通して、アンテオケ教会の働きは1000キロ以上も先に広がる。

①ペテロがヨッパで幻を見た時とは、状況が一変している。

2. 使13:9から、サウロの名前がパウロに変わる。

Act 13:9 しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、

(1) 異邦人伝道が始まると、ラテン名のパウロが使用される。

結論：

1. 第一次伝道旅行の旅程(使13:1~14:28)

- (1) アンテオケ(使13:1~3)
- (2) セルキヤ(使13:4)
- (3) キプロス島のサラミス(使13:5)
- (4) キプロス島のパポス(使13:6~12)
- (5) パンフリヤのペルガ(使13:13)
- (6) ピシデヤのアンテオケ(使13:14~52)
- (7) イコニオム(使14:1~7)
- (8) ルステラ(使14:8~19)
- (9) デルベ(使14:20)
- (10) ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケ(使14:21~23)
- (11) パンフリヤのペルガ、アタリヤ(使14:24~25)
- (12) アンテオケ(使14:26~28)

2. サウロの聖別

(1) 同じ動詞がサウロの聖別に関して3回出て来る。

①「アフォリゾウ」

(2) ガラ1:15~17

Gal 1:15 けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださった方が、

Gal 1:16 異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき、私はすぐに、人には相談せず、

Gal 1:17 先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。

① サウロは、生まれたときから選ばれていた。

② 神のご用のために、この世から区別されていた。

(3) ロマ1:1

Rom 1:1 神の福音のために選ばれ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、

①サウロは、回心のときに、福音のために選び分けられた。

(4) 使13:2

Act 13:2 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われた。

①サウロは、アンテオケ教会で、異邦人伝道のために聖別された。

②特定の召しのための聖別である。

「セルキヤからキプロスへ」

使徒 13 : 4~12

1. はじめに

(1) パウロの伝道旅行

①第一次伝道旅行（13 : 1~14 : 28）

②第二次伝道旅行（15 : 36~18 : 22）

③第三次伝道旅行（18 : 23~21 : 16）

* 「伝道旅行」という名称は出て来ないが、これは学びのために役に立つ。

* アンテオケがこれらの伝道旅行のホームベースである。

* 旅行はアンテオケから始まり、パウロがアンテオケに帰還して終わる。

* 最後の伝道旅行は、パウロがカイザリヤに着いたところで終わる。

* 第一次伝道旅行は、紀元 48 年春から 49 年秋まで、約 1 年半続いた。

(2) 訪問地（地図で確認）

①アンテオケ（使 13 : 1~3）

②セルキヤ（使 13 : 4）

③キプロス島のサラミス（使 13 : 5）

④キプロス島のパポス（使 13 : 6~12）

2. アウトライン

(2) セルキヤ（使 13 : 4）

(3) キプロス島のサラミス（使 13 : 5）

(4) キプロス島のパポス（使 13 : 6~12）

結論：パウロが採用した伝道の原則

(1) 实际的理由

(2) 神学的理由

(3) 心情的理由

キプロス島での伝道について学ぶ。

I. セルキヤ（使 13 : 4）

1. 4 節

Act 13:4 ふたりは聖霊に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った。

(1) ルカは、聖霊の主導権を強調している。

①使 13 : 2

Act 13:2 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われた。

②バルナバとサウロを派遣したのは、究極的には聖霊である。

③今も、この原則は有効に働いている。

(2) ふたりは、セルキヤに下った。

①アンテオケから約 25 キロ西にある港町

②この港町でキプロス行きの船便を予約し、キプロスに渡って行った。

(3) キプロスを最初の宣教地を選んだ理由は、明確には記されていない。

①そこは、バルナバの出身地である。

*バルナバは、キプロス生まれのレビ人であった。

*バルナバは、その地の地形や習慣をよく知っていた。

③そこには、かなりの大きさのユダヤ人共同体が存在していた。

II. キプロス島のサラミス (使 13 : 5)

1. 5 節

Act 13:5 サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣べ始めた。彼らはヨハネを助手として連れていた。

(1) キプロス島について

①セルキヤから約 200 キロを航海すると、東海岸の町サラミスに着く。

②地中海で 3 番目に大きな島である。

*縦 225 キロ、横約 65 キロ

③ギリシア、小アジア、中東の中央に位置する重要な貿易基地である。

④サラミスは、この島で最大の都市であり、経済活動の中心地である。

(2) ふたりは、ユダヤ人の諸会堂で福音を語り始めた。

①ユダヤ人の成人男子が 10 人以上いる所には、必ず会堂が存在していた。

②サラミスのユダヤ人共同体は大きかったので、複数の会堂が存在していた。

③会堂の役割は、神殿のそれとは異なる。

*異邦人社会の中でユダヤ人が生き延びるために不可欠な組織である。

*神のことばとユダヤ人の習慣を学ぶ学校、コミュニティセンター。

*異邦人もそこから祝福を受けていた。

・神を恐れる異邦人、門の改宗者、改宗者

④ふたりが先ず会堂に行った理由は、結論のところで説明する。

(3) 「彼らはヨハネを助手として連れていた」

①使 12 : 25

Act 12:25 任務を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、エルサレムから帰って来た。

②ヨハネ・マルコは、エルサレムからアンテオケに移住していた。

③彼は、バルナバのいとこであった(コロ4:10)。

④彼は、この伝道旅行に参加していた。

*助手、助け人、書記

(4) サラミスでの宣教の結果について、ルカは記録を残していない。

①成果はあったが、特筆すべきものではなかったであろう。

②バルナバとサウロは、その地での使命は終わったと確信した。

③彼らは、島全体を巡回して、パポスまで行った。

III. キプロス島のパポス (使 13 : 6~12)

1. 6~7 節

Act 13:6 島全体を巡回して、パポスまで行ったところ、にせ預言者で、名をバルイエスというユダヤ人の魔術師に出会った。

Act 13:7 この男は地方総督セルギオ・パウロのもとにいた。この総督は賢明な人であって、バルナバとサウロを招いて、神のことばを聞きたいと思っていた。

(1) パポス

①サラミスから約160キロ南西に位置する島の首都

②異邦人伝道に大きな意味があった出来事が起こったので、詳細な記録がある。

③重要な人物が2人登場する。

(2) 地方総督セルギオ・パウロ

①ユダヤ総督(ヘイゲモウン)(procurator)は、皇帝によって任命された。

*総督ポンテオ・ピラト

*総督ペリクス(使23:24)

*総督フェスト(使26:30)

②総督(アンスパトス)(proconsul)は、元老院によって任命された。

*総督セルギオ・パウロ

*紀元52~58年頃の碑文が発掘されている。

・セルギオ・パウロという名前がある。

・彼は、アンスパトスという地位に就いていた。

*ルカは、歴史家として厳密に地位の呼称を使用している。

③彼は、「賢明な人」であった。

*彼は、バルナバとサウロから個人的に神のこぼれを聞きたいと思っていた。

(3) バル・イエス(イエスの息子、救いの息子)

①偽預言者

②ユダヤ人の魔術師

③エルマ(魔術師という意味)

④ローマ世界では、総督が助言者をそばに置くことは普通であった。

*セルギオ・パウロは、ユダヤ人の魔術師をそばに置くことをよしとした。

*ユダヤ人に関する問題について助言を求めたのであろう。

2. 8節

Act 13:8 ところが、魔術師エルマ(エルマという名を訳すと魔術師)は、ふたりに反対して、総督を信仰の道から遠ざけようとした。

(1) 魔術師エルマは、総督が真剣な求道者になろうとしていることに脅威を感じた。

①総督をバルナバとサウロに奪われる可能性がある。

②自分の既得権益が奪われる。

(2) 魔術師エルマは、伝道の妨害をした。

①具体的に何をしたのはかは記録されていない。

②なんらかの方法で、総督を信仰の道から遠ざけようとした。

3. 9~10節

Act 13:9 しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、

Act 13:10 言った。「ああ、あらゆる偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵。おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。

(1) サウロが取った行動

①ここからサウロの名がパウロに変わる。

②彼は、魔術師エルマを叱りつけた。

- ③聖霊の強調がここでも見られる。
- ④セルギオ・パウロの魂を巡る霊の戦いが展開された。
- ⑤パウロの敵は、「**悪魔の子**」である。

(2) ペテロとパウロの類似点

- ①ペテロは、サマリヤにおいて魔術師シモンを叱責した(使8:20~24)。
- ②パウロは、パポスにおいて魔術師エルマを叱責した。

4. 11 節

Act 13:11 見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる」と言った。するとたちまち、かすみとやみが彼をおおったので、彼は手を引いてくれる人を捜し回った。

(1) ペテロとパウロの類似点

- ①ペテロは、アナニヤとサツピラの上に迅速な裁きを宣言した(使5:1~11)。
- ②パウロは、魔術師エルマの上に迅速な裁きを宣言した。

(2) エルマはたちまち盲目になった。

- ①その体験は、パウロもまた通過したものである。
- ②霊的な盲目は、肉体の盲目をもたらすものである。
- ③彼が悔い改めたかどうかは、不明である。
- ④彼の名は、これ以降登場しなくなる。

4. 12 節

Act 13:12 この出来事を見た総督は、主の教えに驚嘆して信仰に入った。

(1) この出来事は、どちらが真の神を伝えているかを明らかにした。

- ①総督は、信仰に入った。
- ②彼は、イエスをメシアと信じた。

(2) この出来事は、3つの意味で重要である。

- ①リーダーシップがバルナバからサウロに移行した。
- ②会堂以外の場で異邦人伝道が成功した最初の例となった。
 - *これ以降、異邦人伝道がより活発に行われるようになる。
- ③象徴的な要素が含まれていた。
 - *バルイエスというユダヤ人は、福音を拒否した。
 - *パウロと同じ名の異邦人は、福音を受け入れた。

結論：パウロが採用した伝道の原則：先ずユダヤ人に、それから異邦人に

1. 実際的理由

- (1) 会堂は各地に分布しており、伝道のインフラストラクチャーの役割を担った。
- (2) ユダヤ人共同体がある所では、必ず会堂があった。
- (3) そこに行けば、ユダヤ人に語りかけることができた。
- (4) さらに、ユダヤ教に関心のある異邦人にも語りかけることができた。

2. 神学的理由

- (1) 使13:46

Act 13:46 そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。

- (2) ロマ1:16

Rom 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

- (3) 神の計画は、先ずユダヤ人に、次に異邦人に、である。

- ①神は、先ずユダヤ人を召された。
- ②神は、諸契約を先ずユダヤ人との間で結ばれた。
- ③神は、先ずユダヤ人を救い、教会を設立された。

3. 心情的理由

- (1) ロマ9:1~5

Rom 9:1 私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。

Rom 9:2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。

Rom 9:3 もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。

Rom 9:4 彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。

Rom 9:5 父祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上におられ、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。

- (2) ロマ10:1

Rom 10:1 兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。

(3) 異邦人の救いがユダヤ人の救いをもたらすとの確信があった（ロマ 11:11～14）。

(4) ペテロの確信（使 3:19～20）

Act 3:19 そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。

Act 3:20 それは、主の御前から回復の時に来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。

(5) 主イエスの教え（マタ 23:39）

Mat 23:39 あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」

4. キリスト教に最大の害を与えたのは、置換神学の教えである。

「ピシデヤのアンテオケ」

使徒 13 : 13~22

1. はじめに

- (1) 第一次伝道旅行 (13 : 1~14 : 28) が始まった。
- (2) 訪問地 (地図で確認)
 - ①アンテオケ (使 13 : 1~3)
 - ②セルキヤ (使 13 : 4)
 - ③キプロス島のサラミス (使 13 : 5)
 - ④キプロス島のパポス (使 13 : 6~12)
 - ⑤パンフリヤのペルガ (使 13 : 13)
 - ⑥ピシデヤのアンテオケ (使 13 : 14~52)

2. アウトライン

- (5) パンフリヤのペルガ (使 13 : 13)
- (6) ピシデヤのアンテオケ (使 13 : 14~52)
 - ①会堂訪問 (使 13 : 14~15)
 - ②ユダヤ人の歴史の回顧 (使 13 : 16~22)
 - ③福音の提示 (使 13 : 23~37)
 - ④決心への招き (使 13 : 38~41)
 - ⑤説教に対する反応 (使 13 : 42~52)

結論 : イスラエルの民の歴史から学ぶ教訓

ピシデヤのアンテオケでの伝道について学ぶ。

V. パンフリヤのペルガ (使 13 : 13)

1. 13 節

Act 13:13 パウロの一行は、パポスから船出して、パンフリヤのペルガに渡った。ここでヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰った。

- (1) キプロス島での成功で励まされた一行は、小アジアに渡って行く。
 - ①パポスから小アジアのペルガまでは、約 290 キロの船旅である。
 - ②パウロがリーダーになっている。バルナバの謙遜が見える。
- (2) ここでヨハネが離脱した。
 - ①ルカはその理由を記していない。

②いくつかの理由が考えられる。

*リーダーシップがバルナバからパウロに移行したので、反発を覚えた。

*当初はキプロス島だけの予定であったが、小アジアが加わった。

*小アジアの山岳地帯を旅行することに対する恐れがあった。

*肉体的に疲労を覚えていた。

*異邦人伝道が過度に強調され始めた。

③しかし、パウロとバルナバは、そのまま先に進んだ。

VI. ピシデヤのアンテオケ（使 13 : 14～52）

VI-1. 会堂訪問（使 13 : 14～15）

1. 14 節

Act 13:14 しかし彼らは、ペルガから進んでピシデヤのアンテオケに行き、安息日に会堂に入って席に着いた。

(1) ペルガからさらに約 160 キロ北に行くと、ピシデヤのアンテオケに着く。

①東西に延びるタウルス山脈を徒歩で横断した。

②非常に険しい地形で、盗賊が潜んでいた（洞窟が多く存在する）。

③ピシデヤのアンテオケは、海拔約 1000 メートルに位置するローマの植民地。

④この町は、小アジアの東西の交易の中心地であった。

⑤この町には、大きなユダヤ人共同体があった。

(2) すでに確立した宣教の原則に従って、安息日に会堂を訪問した。

①先ずユダヤ人に、次に異邦人に。

2. 15 節

Act 13:15 律法と預言者の朗読があつて後、会堂の管理者たちが、彼らのところに人をやってこう言させた。「兄弟たち。あなたがたのうちどなたか、この人たちのために奨励のことばがあったら、どうぞお話しください。」

(1) 会堂での礼拝順序

①礼拝を始めるための儀式的祈り

②「シェマー」

*「聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである」

*申 6 : 4 と民 15 : 37～41 から取られた祈り

③「アミダー」

*共同体の祈りで、「十八祈祷文」と言われる。

- ④その週に課された「トーラー」からの朗詠
- ⑤その週に課された「ハフタラー」(預言者)からの朗詠
 - *預言者とは、預言書と歴史書の一部(ヨシュア、士師、サムエル、列王記)
- ⑥短い奨励のメッセージ

(2) 著名なゲストや巡回ラビが出席していた場合、奨励を依頼する習慣があった。

- ①これは、歓迎の意を表明するためである。
- ②また、同じラビの話によって、礼拝がマンネリ化しないためでもあろう。
- ③この日は、パウロとバルナバに依頼があった。
- ④それを受けて立ったのは、パウロであった。

VI-2. ユダヤ人の歴史の回顧(使13:16~22)

1. 16節

Act 13:16 **そこでパウロが立ち上がり、手を振りながら言った。／「イスラエルの人たち、ならびに神を恐れかしこむ方々。よく聞いてください。**

(1) パウロは立って前方に進み、演壇に上って話し始めた。

- ①「手を振りながら」。パウロも典型的なユダヤ人の話し方をしていた。
- ②特に、2種類の聴衆に語りかけ、注意を喚起した。
 - *イスラエルの人たち(ユダヤ人)
 - *神を恐れかしこむ方々(神を恐れる異邦人)

(2) ルカはパウロの説教に多くのスペースを割いている。

- ①しかし、これはパウロの説教の一部であり、要約である。
- ②内容は、ステパノの裁判での説教に似ている。
- ③パウロは、ユダヤ人の歴史を要約し、回顧する。
- ④強調点は2点ある。
 - *神は、常にイスラエルを顧み、その必要に応じてこられた。
 - *しかしイスラエルは、それに感謝することなく、神に反抗してきた。

2. 17節

Act 13:17 **この民イスラエルの神は、私たちの父祖たちを選び、民がエジプトの地に滞在していた間にこれを強大にし、御腕を高く上げて、彼らをその地から導き出してくださいました。**

(1) 神は、その主権によって族長たちを選ばれた。

- ①神は、アブラハムを選び、そこから選びの民をお作りになった。
 - ②神は、族長たち（アブラハム、イサク、ヤコブ）と無条件契約を結ばれた。
 - ③無条件契約とは、アブラハム契約である。
- (2) 神は、エジプトの地において選びの民を巨大な民に育てられた。
- ①しかし彼らは、その地で奴隷となった。
- (3) 神は、選びの民をエジプトから導き出された。
- ①これは、無条件契約の約束の成就である。
 - ②カナンのは、選びの民に約束された地である。

3. 18 節

Act 13:18 **そして約四十年間、荒野で彼らを耐え忍ばれました。**

- (1) しかし、イスラエルの民は神に感謝することなく、神に反抗し続けた。
- ①荒野で奇跡的に与えられたマナや水に感謝することはなかった。
 - ②また、いつも神に対してつぶやいてばかりいた。
- (2) 民は、不信仰のゆえに荒野を40年間さまようことになった。
- ①民 14 : 34

Num 14:34 **あなたがたが、かの地を探った日数は四十日であった。その一日を一年と数えて、四十年の間あなたがたは自分の咎を負わなければならない。こうしてわたしへの反抗が何かを思い知ろう。**

- ②出エジプトの世代は死に絶え、新しい世代の者たちがカナンの地に入った。
- ③この40年間は、神が忍耐された期間である。

4. 19 節

Act 13:19 **それからカナンの地で、七つの民を滅ぼし、その地を相続財産として分配されました。これが、約四百五十年間のことです。**

- (1) 裁きの期間が終わると、神はカナンの地をイスラエルの民に相続財産としてお与えになった。
- ①これは、アブラハム契約の中の土地の約束の成就である。
- (2) その際神は、その地に住んでいた7つの民を滅ぼされた。
- ①申 7 : 1

Deu 7:1 **あなたが、入って行って、所有しようとしている地に、あなたの神、【主】が、あな**

たを導き入れられるとき、主は、多くの異邦の民、すなわちヘテ人、ギルガシ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およびエブス人の、これらあなたよりも数多く、また強い七つの異邦の民を、あなたの前から追い払われる。

(3) 約 450 年間

- ①これは概数である。
- ②エジプトに寄留した期間（400年）
- ③荒野を放浪した期間（40年間）
- ④カナンの地征服に要した期間（10年）

5. 20～21 節

Act 13:20 その後、預言者サムエルの時代までは、さばき人たちをお遣わしになりました。

Act 13:21 それから彼らが王をほしがったので、神はベニヤミン族の人、キスの子サウロを四十年間お与えになりました。

(1) 神は、土地を与えた上に、神から任命を受けた士師たちを遣わされた。

- ①それでも民は満足しなかった。
- ②彼らは、他の国々のように王を欲しがった。

(2) 神は、預言者サムエルに代わって王をお与えになった。

- ①ベニヤミン族の人、キスの子サウロが王となった。
- ②彼は、40年間イスラエルを統治した。
- ③しかし、サウロは深刻な罪を犯したので、その王朝は断ち切られた。
- ④1サム 13：13～14

1Sa 13:13 サムエルはサウルに言った。「あなたは愚かなことをしたものだ。あなたの神、【主】が命じた命令を守らなかった。【主】は今、イスラエルにあなたの王国を永遠に確立されたであろうに。

1Sa 13:14 今は、あなたの王国は立たない。【主】はご自分の心にかなう人を求め、【主】はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。あなたが、【主】の命じられたことを守らなかったからだ。」

6. 22 節

Act 13:22 それから、彼を退けて、ダビデを立てて王とされましたが、このダビデについてあかしして、こう言われました。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になかった者で、わたしのところを余すところなく実行する。』

(1) 神は、サウルに代わってダビデを王としてお立てになった。

①神は、ダビデと無条件契約を結ばれた。これがダビデ契約である。

②2サム7:15~16

2Sa 7:15 しかし、わたしは、あなたの前からサウルを取り除いて、わたしの恵みをサウルから取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。

2Sa 7:16 あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」

(2) ここで歴史の回顧は終わり、時代は1000年飛んで現代に至る。

①ダビデの子孫イエスの登場

②これ以降、福音の提示に入る

結論：イスラエルの民の歴史から学ぶ教訓

1. 強調点は2点ある。

(1) 神は、常にイスラエルを顧み、その必要に応じてこられた。

(2) しかしイスラエルは、それに感謝することなく、神に反抗してきた。

2. イスラエルを「私たち」という言葉に置き換えてみる。

(1) 神は、常に私たちを顧み、その必要に応じてこられた。

(2) しかし私たちは、それに感謝することなく、神に反抗してきた。

3. 神から受けた恵み

(1) 神は、私のような者を選んでくださった。

(2) 神は、私を無条件契約に招いてくださった(新しい契約)。

(3) 神は、私を死の恐怖と罪の束縛から解放してくださった。

(4) 神は、不信仰な私を忍耐深く導いてくださった。

(5) 詩103:1~5

Psa 103:1 わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。／私のうちにあるすべてのものよ。／聖なる御名をほめたたえよ。

Psa 103:2 わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。／主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

Psa 103:3 主は、あなたのすべての咎を赦し、／あなたのすべての病をいやし、

Psa 103:4 あなたのいのちを穴から贖い、／あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、

Psa 103:5 あなたの一生を良いもので満たされる。／あなたの若さは、鷲のように、新しくなる。

「ピシデヤのアンテオケ(2)」

使徒13:23~41

1. はじめに

- (1) 第一次伝道旅行(13:1~14:28)が始まった。
- (2) 訪問地(地図で確認)
 - ⑤パンフリヤのペルガ(使13:13)
 - ⑥ピシデヤのアンテオケ(使13:14~52)

2. アウトライン

- (6) ピシデヤのアンテオケ(使13:14~52)
 - ①会堂訪問(使13:14~15)
 - ②ユダヤ人の歴史の回顧(使13:16~22)
 - ③福音の提示(使13:23~37)
 - ④決心への招き(使13:38~41)
 - ⑤説教に対する反応(使13:42~52)

結論: 救われるために理解すべきこととは何か。

ピシデヤのアンテオケでの伝道について学ぶ。

VI. ピシデヤのアンテオケ(使13:14~52)

VI-3. 福音の提示(使13:23~37)

1. 23節

Act 13:23 神は、このダビデの子孫から、約束に従って、イスラエルに救い主イエスをお送りになりました。

- (1) パウロによるイスラエルの歴史の回顧は終わった。
 - ①パウロの説教は、ダビデからイエスに約千年間飛ぶ。
 - ②イエスとは誰か。
 - *ダビデの子孫であるが、ダビデよりも偉大なお方である。
 - *約束に従って神からイスラエルの民に送られた救い主である。
 - ③約束とは何か。
 - *イザ11:1

Isa 11:1 エッサイの根株から新芽が生え、／その根から若枝が出て実を結ぶ。

*イザ11:10

Isa 11:10 その日、／エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、／国々は彼を求め、／彼の

いこう所は栄光に輝く。

- (2) 神はダビデ契約によって、ダビデ王朝が永遠に続くことを約束された。
 - ①ダビデ契約は、イスラエルの民の心をメシア到来に向けて準備した。
 - ②イエスは、ダビデの王座に着く永遠の王である。
 - ③アミダー（十八祈禱文）の15番目の祈りは、メシアの到来を願う祈りである。
- (3) イエスが約束の救い主であるというパウロの宣言は、大変勇気あるものである。
 - ①聴衆は、旧約聖書に親しみながらも、異なったメシア理解を持っていた。

2. 24～25 節

Act 13:24 この方がおいでになる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に、前もって悔い改めのバプテスマを宣べ伝えていました。

Act 13:25 ヨハネは、その一生を終えようとするころ、こう言いました。『あなたがたは、私をだれと思うのですか。私はその方ではありません。ご覧なさい。その方は私のあとからおいでになります。私は、その方のくつのひもを解く値うちもありません。』

- (1) パウロはここで、メシアの先駆者であるバプテスマのヨハネを紹介する。
 - ①ヨハネは、主の道を整えるという自らの使命を果たした。
 - ②これは、マラ3:1と4:5の預言の成就である。
 - ③バプテスマのヨハネの奉仕から約20年が経過していた。
 - ④彼は依然として、ユダヤ人共同体では有名であった。
- (2) ヨハネの奉仕のクライマックスは、以下の宣言である。
 - ①私は、メシアではない。
 - ②メシアは、私のあとから来られる。
 - ③私は、その方のくつのひもを解く値打ちもない。
 - ④福音書が完成する前から、パウロは、ヨハネの言葉を正確に知っていた。

3. 26 節

Act 13:26 兄弟の方々、アブラハムの子孫の方々、ならびに皆さんの中で神を恐れかしこむ方々。この救いのことばは、私たちに送られているのです。

- (1) 再びパウロは、ユダヤ人と神を恐れる異邦人に語りかける。
 - ①「この救いのことば」とは、イエスが約束の救い主であるということ。
- (2) 神が与える究極的な備えは、約束のメシアの派遣である。

- ①神は常にイスラエルの民を守り、彼らの必要に応じてこられた。
- ②しかし民は、常に神に対して反抗的であった。
- ③イスラエルの指導者たちは、イエスに関しても同じ過ちを犯した。

4. 27～28 節

Act 13:27 エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者のことばを理解せず、イエスを罪に定めて、その預言を成就させてしまいました。

Act 13:28 そして、死罪に当たる何の理由も見いだせなかったのに、イエスを殺すことをピラトに強要したのです。

- (1) パウロは、イエスの公生涯を省略して直ちに十字架、埋葬、復活のテーマに入る。
 - ①彼は、ユダヤ人の指導者たちは無知のゆえにイエスを有罪にしたと糾弾した。
 - ②会堂では、安息日ごとにメシア預言が朗読されていた。
 - ③それゆえ、無知であることは、責任逃れの口実にはならない。
 - ④指導者たちの無知を指摘する点は、ペテロのメッセージと同じである。

Act 3:17 ですから、兄弟たち。私は知っています。あなたがたは、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたのです。

- (2) イスラエルの指導者たちは、神の究極的な備え(提供)さえも拒否した。
 - ①メシア預言を理解しなかったが、結果的にはその預言を成就させてしまった。
 - ②これは、歴史の大いなる皮肉である。
 - ③サンヘドリンは、有罪の証拠がないのに、イエスをローマの法廷に訴えた。
 - ④ピラトに圧力を加え、イエスを死刑にすることを要求した。

5. 29～30 節

Act 13:29 こうして、イエスについて書いてあることを全部成し終えて後、イエスを十字架から取り降ろして墓の中に納めました。

Act 13:30 しかし、神はこの方を死者の中からよみがえらせたのです。

- (1) ここには「福音の三要素」が書かれている。
 - ①イエスは十字架に付けられ、呪われた者として死なれた。
 - ②イエスの死体は、墓に納められた。
 - ③神はイエスを死者の中からよみがえらせた。

(2) 使 13:29 の訳文の比較

「イエスを十字架から取り降ろして墓の中に納めました」(新改訳)

「イエスを木から降ろして、墓に納めました」（新改訳 2017）

「人々はイエスを木から降ろし、墓に葬りました」（新共同訳）

「人々はイエスを木から取りおろして墓に葬った」（口語訳）

- ①スタウロス（十字架）をいう言葉を避け、クスロン（木）を使っている。
- ②これは、会堂での公の説教という文脈の中での配慮である。
- ③ペテロも同じ配慮をしている（使 2 : 23、5 : 30、10 : 29）。

6. 31 節

Act 13:31 イエスは幾日にもわたり、ご自分といっしょにガリラヤからエルサレムに上った人たちに、現れました。きょう、その人たちがこの民に対してイエスの証人となっています。

(1) 復活の証拠

- ①イエスは幾日にもわたり、12 弟子たちに現れた。
- ②彼らは、ユダヤ人たちに対して、イエスの復活を目撃した証人となっている。

7. 32～33 節

Act 13:32 私たちは、神が父祖たちに対してなされた約束について、あなたがたに良い知らせをしているのです。

Act 13:33 神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされました。詩篇の第二篇に、『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ』と書いてあるとおりです。

- (1) パウロが宣べ伝えている福音は、神が先祖たちに与えた約束そのものである。
- (2) イエスが復活のメシアであることの証明として、メシア預言が3つ引用される。
 - ①詩 2 : 7、②イザ 55 : 3、③詩 16 : 10

(3) 詩 2 : 7

「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ」

- ①神はイエスを死者の中からよみがえらせ、高く引き上げられた。
- ②イエスは復活により、神の子であることが証明された。
- ③パウロのこの解釈は、ユダヤ人の伝統的な解釈と一致する。

*詩 2 篇は、メシア的詩篇である。

8. 34～35 節

Act 13:34 神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちることのない方とされたことについては、『わたしはダビデに約束した聖なる確かな祝福を、あなたがたに与える』というように言われていました。

Act 13:35 ですから、ほかの所でこう言うておられます。『あなたは、あなたの聖者を朽ち果てるままにはしておかない。』

(1) イザ 55 : 3

Isa 55:3 耳を傾け、わたしのところに出て来い。／聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。／わたしはあなたがたとこしえの契約、／ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。

(2) 詩 16 : 10

Psa 16:10 まことに、あなたは、私のたましいを／よみに捨ておかず、／あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。

(3) この2つの聖句から導き出される結論

- ①神は、とこしえに統治するダビデの子を与えると約束された。
- ②神は、「聖徒」(聖者) (the Holy One) を墓の中に置いたままにはしない。
- ③神はイエスを復活させ、朽ちることのない方とされた。

9. 36～37 節

Act 13:36 ダビデは、その生きていた時代において神のみこころに仕えて後、死んで父祖たちの仲間に加えられ、ついに朽ち果てました。

Act 13:37 しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちることがありませんでした。

(1) ダビデは死んで、墓の中で朽ち果てた。

- ①それゆえ、詩 16 : 10 がダビデに適用されるはずはない。
- ②神がよみがえらせたイエスは、朽ちることがない。

VI-4. 決心への招き (使 13 : 38～41)

1. 38～39 節

Act 13:38 ですから、兄弟たち。あなたがたに罪の赦しが宣べられているのはこの方によるということ、よく知っておいてください。

Act 13:39 モーセの律法によっては解放されることのできなかつたすべての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです。

(1) ここからパウロは、特に同胞のユダヤ人たちに語りかける。

- ①テーマがモーセの律法である。

(2) モーセの律法によっては義とされることのない罪があった。

- ①民 15 : 30

Num 15:30 国に生まれた者でも、在留異国人でも、故意に罪を犯す者は、【主】を冒瀆する者であって、その者は民の間から断たれなければならない。

②ミシュナには、36の赦されない罪が列挙されてる。

③意図的に違反した場合に、義とされる方法のない重罪である。

* 獣姦、近親相姦、偶像礼拝、冒瀆、安息日違反、過越の祭りや贖罪の日に対する違反、など。

(3) しかし、イエスによって、すべての点で罪の赦しを得られる。

①イエスを救い主として信じるなら、すべての罪が赦される。

②福音書によれば、罪を赦すことができるのは神だけである。

③ここでパウロは、イエスのメシア性と神性を宣言してる。

2. 40～41節

Act 13:40 ですから、預言者に言われているような事が、あなたがたの上に起こらないように気をつけなさい。

Act 13:41 『見よ。あざける者たち。驚け。そして滅びよ。／わたしはおまえたちの時代に一つのことをする。／それは、おまえたちに、どんなに説明しても、／どうてい信じられないほどのことである。』

(1) 警告の言葉が語られる。

①イエスはトーラーよりも優れ、トーラーよりも力のある方である。

②それゆえ、自らの信仰や人生観を変更すべきである。

(2) 最後は、ハバクク書1:5からの引用で終わる。

①神がされた「一つのこと」とは、イエスの復活である。

②それを信じなければ、滅びる。

③先祖たちの不信仰のサイクルを断ち切って、裁きを免れるように。

結論：救われるために理解すべきこととは何か。

1. ある程度の信仰はあったが、救われていなかった人たちがいた。

(1) エチオピア人の宦官(使8:26～39)

(2) コルネリオ(使10章)

(3) アポロ(使18:24～28)

(4) エペソの12人の弟子たち(使19:1～7)

2. 救いは、神(イエス・キリスト)への信頼(信仰)によって与えられる。
 - (1) イエス・キリストをどのような方として信じたかが重要である。
 - (2) 救いに至る信仰には、最低限の福音理解が要求される。

3. 「福音の三要素」は、最低限の理解である。
 - (1) イエスは私たちの罪のために死なれた。
 - ① イエスが神の子であることを理解しなければ、イエスの死は意味がなくなる。
 - ② イエスの死の意味が理解できないなら、自分が罪赦される必要があることが理解できない。
 - (2) 死んで墓に葬られた。
 - ① イエスは確実に死なれた。
 - ② イエスが死んだことを理解しなければ、復活は理解できない。
 - ③ 埋葬は、イザ53:9の預言の成就である。
 - (3) 3日目に甦られた。
 - ① 復活が理解できないなら、イエスの死の意味も理解できない。
 - ② 復活が信じられないなら、生きておられる救い主への信仰は成り立たない。

「ピシデヤのアンテオケ(3)」

使徒13:42~52

1. はじめに

- (1) 第一次伝道旅行(13:1~14:28)が始まった。
- (2) 訪問地(地図で確認)
 - ⑤パンフリヤのペルガ(使13:13)
 - ⑥ピシデヤのアンテオケ(使13:14~52)

2. アウトライン

- (6) ピシデヤのアンテオケ(使13:14~52)
 - ①会堂訪問(使13:14~15)
 - ②ユダヤ人の歴史の回顧(使13:16~22)
 - ③福音の提示(使13:23~37)
 - ④決心への招き(使13:38~41)
 - ⑤説教に対する反応(使13:42~52)

結論: イザヤ書49:6の4つの適用

- (1) ユダヤ人
- (2) イエス
- (3) パウロとバルナバ
- (4) 私たち

ピシデヤのアンテオケでの伝道について学ぶ。

VI. ピシデヤのアンテオケ(使13:14~52)

VI-5. 説教に対する反応(使13:42~52)

1. 42節

Act 13:42 ふたりが会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。

(1)パウロの説教の要約

- ①イエスは約束のメシアである。
- ②神はイエスを死者の中から復活させた。
- ③イエスによって、あらゆる罪が赦される。
- ④先祖たちやエルサレムの指導者たちのように、神に反抗してはならない。

(2) パウロの説教は、大きな反響を呼んだ。

①「ふたりが会堂を出るとき」＝「パウロとバルナバが会堂を出るとき」

*ふたりは、集会在正式に終わる前に会堂を出たのであろう。

②「人々は」＝「出席していた人々は」

③翌週も同じ説教をしてくれるように頼んだ。

(3) 使13:42のKJV訳は、誤訳である。

①The Textus Receptusは、「the Gentiles」という言葉を挿入している。

②最初からユダヤ人は福音を拒否し、異邦人は受け入れたという印象を与える。

③「And when the Jews were gone out of the synagogue, the Gentiles besought that these words might be preached to them the next sabbath.」

2. 43節

Act 13:43 会堂の集会在終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちが、パウロとバルナバについて来たので、ふたりは彼らと話し合っ、いつまでも神の恵みにとどまっているように勧めた。

(1) 集会后も、多くの人たちがパウロとバルナバについて来た。

①ふたりについて来たのは、福音を信じた人たちであらう。

②福音を信じたユダヤ人がいた。

③「神を敬う改宗者たち」がいた(特殊な言葉である)。

*神を敬う異邦人

*改宗した異邦人

(2) パウロとバルナバは、彼らと話し合っ。

①「いつまでも神の恵みにとどまっているように勧めた」

②ユダヤ教に親しんだ人たちは、習慣的に律法による義を求める傾向があっ。

③彼らは、救いは信仰と恵みによって与えられるということを理解した。

④ユダヤ教や律法ではなく、信仰によって救われるということを理解した。

3. 44～45節

Act 13:44 次の安息日には、ほとんど町中の人、神のことばを聞きに集まって来た。

Act 13:45 しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしっ。

(1) 次の安息日に、パウロの説教の影響の大きさが明らかになった。

- ①ほとんど町中の人が、パウロの説教を聞きに集まって来た。
 - *聞いたことのない内容、論争的になっている内容
 - *ユダヤ人の指導者たちは、1週間の間、熱心に聖書を調べたに違いない。
- ②パウロの説教の噂は、町中に広がっていた。

(2) ユダヤ人たちは、反発した。

- ①これは、福音そのものに対する反発ではない。
- ②異邦人が大挙して会堂に押し寄せてきたことで、ねたみを覚えた。
 - *背後にラビたちの影響があったはずである。
- ③このまま行けば、ユダヤ教の伝統や律法は無視されてしまう。
- ④そこで彼らは、「パウロの話に反対して、口ぎたなくののしった」。
- ⑤パウロとバルナバは、説教を続けることができない。
 - *彼らは、その会堂の善意によって説教の機会が与えられた講師である。

4. 46～47 節

Act 13:46 **そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。」**

Act 13:47 **なぜなら、主は私たちに、こう命じておられるからです。／『わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。／あなたが地の果てまでも救いをもたらすためである。』**

(1) パウロとバルナバの宣言

- ①自分たちは、神のことばを先ずユダヤ人に語るという使命を果たした。
- ②「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかった」
- ③神が定めた伝道の順番は、先ずユダヤ人、次に異邦人である。
- ④ロマ1:16

Rom 1:16 **私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。**

- ⑤ピシデヤのアンテオケのユダヤ人共同体は、キリストの福音を拒否した。
 - *つまり、永遠のいのちの提供を拒否したのである。
- ⑥パウロとバルナバは、次に異邦人に向う。
- ⑦このパターンは、使徒の働きの中では、パウロがローマに着くまで続く。

(2) イザ49:6

Isa 49:6 **主は仰せられる。／「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、／ヤコブの諸部族**

を立たせ、／イスラエルのとどめられている者たちを／帰らせるだけではない。／わたしはあなたを諸国の民の光とし、／地の果てにまでわたしの救いを／もたらす者とする。」

5. 48～49節

Act 13:48 異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った。

Act 13:49 こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。

(1) 集会に出席していた異邦人たちは、喜んだ。

- ①パウロに反発するユダヤ人たちとは対照的である。
- ②信仰だけが要求され、割礼は不要となる。
- ③彼らは罪の赦しと律法からの解放をもたらしてくれる主のみことばを賛美した。

(2) 「永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った」

- ①神の選びの教理がここに啓示されている。
- ②ユダヤ人の中に選ばれた人がいる。
- ③異邦人の中にも、選ばれた人がいる。
- ④彼らはみな、信仰に入った。
- ⑤神の主権と人間の自由意思は、ともに信じなければならない。
*人間の理性では矛盾に見えるかもしれないが、神にとっては矛盾ではない。

(3) 「こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった」

- ①神に選ばれた人たちによって、福音はこの地方全体に広まった。
- ②ユダヤ人たちは、それとは正反対の行動を起した。

6. 50～51節

Act 13:50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。

Act 13:51 ふたりは、彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオムへ行った。

(1) ユダヤ人たちは、パウロとバルナバをその地方から追い出した。

- ①当時は、ユダヤ教に関心を示す女性たちが多くいた。
*考える時間が十分ある。
*割礼の心配をする必要がない。
- ②神を敬う貴婦人たちは、相当な力を持っていた。
*夫たちに働きかけた可能性もある。
- ③町の有力者たちとは、市の高官たちであろう。

③2テモ3:11

2Ti 3:11 またアンテオケ、イコニオム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。しかし、主はいっさいのことから私を救い出してくださいました。

(2) ピシデヤのアンテオケを去ってイコニオムへ

①「足のちりを払い落として、」

②マタ10:14

Mat 10:14 もしだれも、あなたがたを受け入れず、あなたがたのことばに耳を傾けないなら、その家またはその町を出て行くときに、あなたがたの足のちりを払い落とさない。

③片方のサンダルを脱ぎ、ちりを払い落とす。

*この地は、一片のちりに至るまで汚れていることを示す儀式である。

④ふたりは、南東に約135キロ移動して、イコニオムに行く。

7. 52節

Act 13:52 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

(1) この町に小さな教会が誕生した。

①喜びに満たされていた。

*喜びは、福音の実である。

②聖霊に満たされていた。

結論：イザヤ書49:6の4つの適用

Isa 49:6 主は仰せられる。／「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、／ヤコブの諸部族を立たせ、／イスラエルのとどめられている者たちを／帰らせるだけではない。／わたしはあなたを諸国の民の光とし、／地の果てにまでわたしの救いを／もたらす者とする。」

(1) ユダヤ人

①イザ49:3

Isa 49:3 そして、私に仰せられた。／「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。／わたしはあなたのうちに、／わたしの栄光を現す。」

②ユダヤ人は、「諸国民の光」となるという使命を果たすことに失敗した。

③今もその状態が続いている。

④将来、ユダヤ人たちはその使命を果たすようになる。

(2) イエス

①ルカ2:32

Luk 2:32 異邦人を照らす啓示の光、／御民イスラエルの光栄です。」

②これは、シメオンが幼子イエスに関して語ったことばである。

③イエスは、ユダヤ人にとっても、異邦人にとっても光となられた。

(3) パウロとバルナバ

①パウロとバルナバは、この預言を自分たちに適用している。

②自分たちは、イエスと一体である。

③自分たちは、イエスのしもべである。

④それゆえ、ユダヤ人だけでなく異邦人にも福音を伝える。

(4) 私たち

①まずユダヤ人に、次に異邦人に、という原則は生きている。

②ユダヤ人伝道は、現在進行形である。

③異邦人伝道は、携挙をもたらすものである。

④携挙は、ユダヤ人の民族的救いをもたらすものである。

「イコニオム」

使徒 14 : 1~7

1. はじめに

- (1) 第一次伝道旅行（13 : 1~14 : 28）が始まった。
- (2) 訪問地（地図で確認）
 - ⑥ピシデヤのアンテオケ（使 13 : 14~52）
 - *パウロの伝道のパターンが明らかになった。
 - ⑦イコニオム（使 14 : 1~7）
 - *トロス山脈の南側を東に移動した。
 - *イコニオムでも同じパターンが繰り返される。
 - *現在は、コンヤと呼ばれる都市で、モスクが建っている。

2. アウトライン

- (7) イコニオム（使 14 : 1~7）
 - ①会堂訪問（1節）
 - ②説教に対する反応（2~3節）
 - ③迫害の勃発（4~7節）

結論：使徒の定義

イコニオムでの伝道について学ぶ。

VII. イコニオム（使 14 : 1~7）

VII-1. 会堂訪問（1節）

1. 1節

Act 14:1 イコニオムでも、ふたりは連れ立ってユダヤ人の会堂に入り、話をすると、ユダヤ人もギリシヤ人も大ぜいの人々が信仰に入った。

- (1) イコニオム
 - ①トロス（タウロス）山脈は、トルコ中央部と南部の地中海地方を分けている。
 - ②イコニオムは、トロス山脈の麓に位置する商業都市である（ガラテヤ地方）。
 - *豊かな町ではあったが、エペソやスミルナのようなサイズではない。
 - *いわば田舎町であった。
- (2) ピシデヤのアンテオケの時と同じパターンが見られる。

①会堂を訪問する。

*ディアスポラの地に会堂があったことは、神の摂理である。

*そこで、巡回ラビとして説教の機会が与えられる。

②先ずユダヤ人に語りかける。

③そこには、神を恐れる異邦人もいた。

④使 13 : 46 ピシデヤのアンテオケにて

Act 13:46 そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。

⑤パウロの行動は矛盾したものではない。

*ピシデヤのアンテオケのユダヤ人共同体は、福音を拒否した。

*イコニオムのユダヤ人共同体は、それとは別のグループである。

(3) 信じる人が多く起された。

①聖霊がパウロとバルナバの働きを祝しておられる。

②ユダヤ人が信じた。

②ギリシア人も信じた。

*彼らは、神を恐れる異邦人である。

VII-2. 説教に対する反応 (2~3 節)

1. 2 節

Act 14:2 しかし、信じようとしないうダヤ人たちは、異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対し悪意を抱かせた。

(1) ピシデヤのアンテオケの時と同じことが起こった。

①使 13 : 49~50

Act 13:49 こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。

Act 13:50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。

②信じようとしないうダヤ人たちが多くいた。

③彼らは、異邦人たちをそそのかした。

*「煽動した」(新改訳 2017)

④彼らは、信じた者たちと異邦人たちの間に、くさびを打ち込んだ。

2. 3節

Act 14:3 **それでも、ふたりは長らく滞在し、主によって大胆に語った。主は、彼らの手にしるしと不思議なわざを行わせ、御恵みのことばの証明をされた。**

(1) ふたりはイコニオムに長らく滞在した。

①「**それでも**」(men oun)

*「それにもかかわらず」(口語訳)

*日本語訳は、ほとんどが、「試練にもかかわらず」という意味に訳している。

*英語訳は、ほとんどが、「so」「therefore」と訳している。

②逆接として訳すか、順接として訳すかで、意味が大きく変わってくる。

③順接に訳せば、迫害は伝道のチャンスだという意味になる。

*パウロとバルナバは、説教に対する手応えを感じたのである。

* (ILL) LAにおけるハーベスト・タイムの好感度

④1 コリ 16 : 8~9

1Co 16:8 **しかし、五旬節まではエペソに滞在するつもりです。**

1Co 16:9 **というのは、働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。**

④「**長らく滞在し**」

*半年前後であろう。

(2)「**主によって大胆に語った**」

①訳文の比較

「**主によって大胆に語った**」(新改訳)(新改訳2017)

「**主を頼みとして勇敢に語った**」(新共同訳)

「**大胆に主のことを語った**」(口語訳)

「**主によりて臆せずして語り**」(文語訳)

「speaking boldly in the Lord,」(KJV)(ASV)

②「in」という前置詞は、ギリシア語で「エピ」である。

③「キリストの代理人として大胆に語った」と理解するのが良いと思う。

④大胆さは、主の代理人として語る時に生まれて来るものである。

(3)「**主は、彼らの手にしるしと不思議なわざを行わせ、**」

①主は、忠実なしもべを祝された。

②「しるし」(signs)と「不思議」(wonders)

*同じ御業を2つの視点から描写したものである。

*「しるし」は、使徒たちが語る内容を保証した。

* 「不思議」は、それを見た者に畏怖の念を抱かせた。

(4) 「御恵みのことばの証明をされた」

- ①パウロが語った説教の内容は、神の恵みであった。
- ②恵みと信仰によって罪の束縛から解放される。
- ③ガラ3:4~5

Gal 3:4 あなたがたがあれほどのことを経験したのは、むだだったのでしょうか。万が一にもそんなことはないでしょうが。

Gal 3:5 とすれば、あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で奇蹟を行われた方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなさったのですか。それともあなたがたが信仰をもって聞いたからですか。

VII-3. 迫害の勃発(4~7節)

1. 4節

Act 14:4 ところが、町の人々は二派に分かれ、ある者はユダヤ人の側につき、ある者は使徒たちの側についた。

- (1) 町が分裂した。
 - ①これは、パウロとバルナバの宣教が有効であったことのしるしである。
 - ②福音は、聞く人を、光に付く人と闇に留まる人に二分する。
 - ③信じようとしなないユダヤ人の側に付く異邦人たちがいた。
 - ④使徒たちの側に付く異邦人たちがいた。

2. 5節

Act 14:5 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちといっしょになって、使徒たちをはずかしめて、石打ちにしようとして企てたとき、

- (1) 迫害は危機的状況に至った。
 - ①不信仰な異邦人、不信仰なユダヤ人、会堂のラビたち
 - ②使徒たちを石打ちにしようとした。
 - ③首謀者はユダヤ人である。石打ちの刑は、ユダヤ的なものである。

3. 6~7節

Act 14:6 ふたりはそれを知って、ルカオニヤの町であるルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、

Act 14:7 そこで福音の宣教を続けた。

- (1) 知恵ある対応
 - ①危険から身を避けることである。

- (2) 彼らは、ガラテヤ地方の別の場所に移動した。
 - ①ルカオニヤの町、ルステラとデルベ、およびその付近の地方
 - ②小アジアの中央部に移動した。

- (3) そこで福音の宣教を続けた。
 - ①宣教の情熱は衰えなかった。
 - ②留まるタイミングと避難するタイミングをどのように判断するか。
 - ③最終的には、聖霊の導きである。

結論：使徒の定義

1. 使 14：4 でパウロとバルナバは使徒と呼ばれている。

Act 14:4 ところが、町の人々は二派に分かれ、ある者はユダヤ人の側につき、ある者は使徒たちの側についた。

- (1) 単に教会から派遣された宣教師という意味ではない。
- (2) また、12使徒のひとりという意味でもない。
- (3) 第2グループの使徒という意味である。

2. 使徒の資格

- (1) 復活の主と出会っていること

①1コリ9：1

1Co 9:1 私には自由がないのでしょうか。私は使徒ではないのでしょうか。私は私たちの主イエスを見たのではないのでしょうか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。

- (2) 主から任命を受けて派遣されていること

①そのしるしが、主が彼らを通してなされる「しるし」と「不思議」である。

②2コリ12：12

2Co 12:12 使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間で行われた、しるしと不思議と力あるわざです。

③一般の信徒たちが「しるし」と「不思議」を行っている例は出て来ない。

3. 使徒職の回復の教えは、聖書的ではない。

(1) 使徒たちと預言者たちは、教会の土台である。

Eph 2:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

- ①普遍的教会が破壊されたことはない。
- ②それゆえ、普遍的教会が使徒たちと預言者たちという土台を失ったこともない。

(2) 私たちには、「使徒たちの教え」が与えられている。

- ①使徒たちの教えとは、新約聖書そのものである。
- ②使徒たちと預言者たちの回復を主張することは、新約聖書以上の権威の存在を認めることになる。

「ルステラ」
使徒 14：8～19

1. はじめに

- (1) 第一次伝道旅行（13：1～14：28）が始まった。
- (2) 訪問地（地図で確認）
 - ⑦イコニオム（使 14：1～7）
*石打の刑を避けて、町を出た。
 - ⑧ルステラ（使 14：8～19）

2. アウトライン

- (8) ルステラ（使 14：8～19）
 - ①足の不自由な人の癒し（8～10 節）
 - ②群衆の反応（11～13 節）
 - ③パウロとバルナバの説教（14～18 節）
 - ④石打ちにされるパウロ（19 節）

結論：異邦人に与えられている啓示と救いの方法

ルステラでの伝道について学ぶ。

VIII-1. 足の不自由な人の癒し（8～10 節）

1. 8～9 節 a

Act 14:8 ルステラでのことであるが、ある足のきかない人がすわっていた。彼は生まれつき足のなえた人で、歩いたことがなかった。

Act 14:9a この人がパウロの話すことに耳を傾けていた。

(1) ルステラ

- ①ピシデヤのアンテオケから約 160 キロ離れた小さな町、ローマの植民都市。
- ②この町は、幹線道路からは離れていた。
- ③会堂を維持できるほどのユダヤ人人口はなかった。
- ④そこでパウロは、当時の巡回哲学者のように路上で教えた。
*彼は、アゴラ（広場、市場）で福音を語った。

(2) そこに、生まれつき足の動かない人がすわっていた。

- ①ルカは、この人の惨状をよく伝えている。

*8節（新改訳2017）

Act 14:8 さてルステラで、足の不自由な人が座っていた。彼は生まれつき足が動かず、これまで一度も歩いたことがなかった。

②会堂がないので、神は別の方法を用意してくださった。

*足の不自由な人の癒しが人々の歓心呼んだ。

(3) 彼は、パウロの話すことに耳を傾けていた。

①ラムゼイは、彼は改宗者だと考えている。

②パウロは、イコニオムで行われたしるしと不思議について語ったのであろう。

2. 9b～10節

Act 14:9b パウロは彼に目を留め、いやされる信仰があるのを見て、

Act 14:10 大声で、「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は飛び上がって、歩き出した。

(1) パウロは、この人の霊的状态を見抜いた。

①「いやされる信仰がある」とは、パウロの説教を信じたということである。

②真の伝道者は、聞く人が本当に信じたかどうかを感じ取ることができる。

(2) 使3:1～26にあるペテロによる足の不自由な人の癒しと似ている。

①目を留めた。

②「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と命じた。

③相手は、飛び上がって歩き出した。

*彼は、信じていたので、パウロの言葉に従ったのである。

(3) これは、パウロの使徒職の証明である。

VIII-2. 群衆の反応（11～13節）

1. 11～12節

Act 14:11 パウロのしたことを見た群衆は、声を張り上げ、ルカオニヤ語で、「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ」と言った。

Act 14:12 そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人であったので、パウロをヘルメスと呼んだ。

(1) この奇跡を目撃した群衆は、興奮した。

①ルカオニヤ語で、大声で叫んだ。

②「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ」

*パウロとバルナバには、何を言っているのか分からない。

(2) パウロとバルナバに名前を付けた。

①バルナバはゼウス。

*ギリシアの神々の中の王

②パウロはヘルメス。

*神の代弁者

(3) 皇帝アウグストの時代に生きたローマ人の詩人オービットが、この地方に伝わる伝説を記録している。

①昔、ゼウスとヘルメスが人間の姿を取ってこの地方を訪問したことがあった。

②誰も宿を提供しようとしなかったが、老夫婦が彼らを家に迎えた。

③その瞬間、老夫婦の家は神殿に変わり、町は破壊された。

(4) ルステラの住民たちは、先祖と同じ過ちを犯したくなかったのである。

①パウロとバルナバには、何が起きているのか分からない。

2. 13 節

Act 14:13 すると、町の門の前にあるゼウス神殿の祭司は、雄牛数頭と花飾りを門の前に携えて来て、群衆といっしょに、いけにえをささげようとした。

(1) ゼウス神殿の祭司が、いけにえの用意を始めた。

①パウロとバルナバの前に、いけにえと花飾りを捧げようとした。

*人々は、パウロとバルナバを神として礼拝しようとしているのである。

②ここでは、迫害よりも危険なことが起こりつつあった。

③キリストよりも、キリストの福音を伝える僕に関心が向けられる危険性である。

VIII-3. パウロとバルナバの説教 (14~18 節)

1. 14~15 節

Act 14:14 これを聞いた使徒たち、バルナバとパウロは、衣を裂いて、群衆の中に駆け込み、叫びながら、

Act 14:15 言った。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とそこにあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちで

す。

- (1) バルナバとパウロは、ようやく何が起きているかを理解した。
 - ①ここで再び、「使徒たち」という言葉が使われている。
 - ②ふたりは、衣を裂いた。驚き、悲しみ、落胆、怒りなどの表現。
 - ③群衆の中に駆け込み、叫びながら説教を始めた。

- (2) 説教の内容は、異邦人を意識したものである。
 - ①ふたりは、ヘブル語聖書にもギリシア哲学にも言及しない。
 - ②天地創造の神を知らない人に、メシアの話はできない。
 - ③そこで最も基本的な内容を伝えようとしている。
 - *自分たちは、皆さんと同じ人間である。
 - *天と地を創造された神は、生ける神である。
 - *その神が、空しい偶像礼拝を捨てて、神に立ち返るように招いておられる。
 - *自分たちは、神に立ち返るようにと福音を宣べ伝えている者たちである。

2. 16～17 節

Act 14:16 過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。

Act 14:17 とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださったのです。」

- (1) 福音が伝えられる前の時代の異邦人たちの状態は、どうだったのか。
 - ①16 節の訳文の比較
「過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました」（新改訳）
「神は、過ぎ去った時代には、あらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むままにしておられました」（新改訳 2017）
 - ②神は忍耐深く、時を待っておられたのである。

- (2) しかし、過ぎ去った時代にあっても、神が存在するという証拠は与えておられた。
 - ①天からの雨
 - ②実りの季節
 - ③食物と喜び

3. 18 節

Act 14:18 こう言って、ようやくのことで、群衆が彼らにいけにえをささげるのをやめさせた。

(1) ふたりの説教は、大した効果がなかった。

①ようやくのことで、群衆が彼らにいけにえをささげるのをやめさせた。

VIII-4. 石打ちにされるパウロ (19節)

1. 19節

Act 14:19 ところが、アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。

(1) アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが追跡して来た。

①群衆は容易に煽動された。

②彼らはパウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。

③首謀者がユダヤ人であったことが分かる。

(2) パウロの体験

①2コリ 11:25

2Co 11:25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。

②2テモ 3:11

2Ti 3:11 またアンテオケ、イコニオム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。しかし、主はいっさいのことから私を救い出してくださいました。

③ガラ 6:17

Gal 6:17 これからは、だれも私を煩わさないようにしてください。私は、この身に、イエスの焼き印を帯びているのですから。

*キリストのゆえに受けた傷

(3) パウロの受難の預言は、ダマスコの信者アナニヤに与えられていた。

①使 9:16

Act 9:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

②ステパノの石打ちに関わったパウロ自身が、石打ちにされた。

(4) 20節

Act 14:20 しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。その翌日、彼はバルナバとともにデルベに向かった。

①ルステラでの伝道が失敗だったと思う必要はない。

②使 16 : 1~2

Act 16:1 それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシヤ人を父としていたが、

Act 16:2 ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった。

結論：異邦人に与えられている啓示と救いの方法

1. 使 14 : 16（新改訳 2017）

Act 14:16 神は、過ぎ去った時代には、あらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むままにしておられました。

(1) 過ぎ去った時代には、異邦人は神から直接的な啓示を受けていなかった。

(2) しかし、一般啓示は与えられていた。

2. 人は死ぬと神の裁きにあうが、裁きの原則は、以下のようなものである。

(1) 人は、自分に与えられている光の量（啓示の量）によって裁かれる。

(2) 福音を聞いたことのない人は、一般啓示によって裁かれる。

(3) 人は、自分に与えられている光（啓示）に応答して真剣に神を求めるなら、神はその人をさまざまな方法を通して救いに導かれる。

3. すでに死んだ人に関しては、神にお任せすべきである。

(1) 神は愛と義の原則で対応されるので、私たちもその判断に満足することになる。

4. 今の時代、人は福音を信じる信仰によって救われる。

(1) 信仰の内容は、福音の三要素である。

①キリストが私たちの罪のために死なれたこと

②死んで墓に葬られたこと

③3日目に復活されたこと

(2) 信仰の対象は、イエス・キリストである。

「デルベからアンテオケへの帰還」

使徒 14 : 20～28

1. はじめに

- (1) 第一次伝道旅行（13 : 1～14 : 28）が始まった。
- (2) 訪問地（地図で確認）
 - ⑦イコニオム（使 14 : 1～7）
*石打の刑を避けて、町を出た。
 - ⑧ルステラ（使 14 : 8～19）
*石打の刑でパウロは瀕死の状態になった。
 - ⑨デルベ（使 14 : 20）
 - ⑩ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケ（使 14 : 21～23）
 - ⑪パンフリヤのペルガ、アタリヤ（使 14 : 24～25）
 - ⑫アンテオケ（使 14 : 26～28）

2. アウトライン

9. デルベ（使 14 : 20）
10. ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケ（使 14 : 21～23）
11. パンフリヤのペルガ、アタリヤ（使 14 : 24～25）
12. アンテオケ（使 14 : 26～28）

結論：第一次伝道旅行のまとめ

第一次伝道旅行の最後の部分について学ぶ。

IX. デルベ（使 14 : 20～21a）

1. 20 節

Act 14:20 しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町に入ってしまった。その翌日、彼はバルナバとともにデルベに向かった。

- (1) ルステラで、パウロは石打の刑に遭った。
 - ①ユダヤ人たちは、パウロが死んだものと思い、町の外に引きずり出した。
 - ②彼らは、その場からいなくなった。
- (2) 信者たちはパウロの周りに集まって来た。
 - ①パウロの宣教の結果、小さな教会が誕生していた。

- ②信者たちは、パウロが生きているのか死んだのかを確かめに来た。
 - *生きているなら、癒しを祈る必要がある。
 - *死んだのなら、埋葬の準備をする必要がある。
 - ③信者の群れの中に、青年テモテ(当時15歳)がいた可能性がある。
- (3) しかしパウロは、すぐに立ち上がって町に入って行った。
- ①これは奇跡的な癒しである。
 - ②パウロは、立ち上がって町に戻って行った。
 - ③町の住民たちがどのような態度を示したかについては、ルカは記録していない。
- (4) 翌日、パウロはバルナバとともにデルベに向った。
- ①ルステラに居続けるのは得策ではない。
 - ②デルベは、ルステラから約95キロ離れた町。
 - ③ローマ帝国の東の境界にある町。

2. 21節 a

Act 14:21a 彼らはその町で福音を宣べ、多くの人を弟子としてから、

- (5) デルベでの伝道は、大いに祝された。
- ①ルカの記述は、簡潔なものである。
 - *彼らはその町で福音を宣べ伝えた。
 - *そして、多くの人を弟子とした。
 - ②神は、必要な時に私たちを励ましてくださる。

X. ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケ(使14:21~23)

1. 21節 b

Act 14:21b ルステラとイコニオムとアンテオケとに引き返して、

- (1) デルベはローマ帝国の東の端にある町である。
- ①そこから先には行けないので、元来た道を引き返す。
 - ②ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケ
 - ③これらの町々で、パウロは迫害に遭ってきた。
- (2) それらの町々を再度訪問する理由は、フォローアップのためである。
- ①パウロとバルナバは、伝道の次に弟子訓練が必要であることを知っていた。
 - ②彼らの信仰、献身、勇気に着目しよう。

2. 22節

Act 14:22 弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ」と言った。

(1) フォローアップの内容

- ①新しく信仰に入った者たちの心を強めた。
- ②イエスを信じる信仰にとどまるように勧めた。
- ③異教世界の中から救われた者たちは、大いに励ましを必要としていた。
- ④これは、組織神学的な慰めである。

(2) 「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ」

- ①神の国に入るための条件は、多くの苦難を経験することだという意味ではない。
*彼らは、すでに信仰によって救われていた人たちである。
- ②彼らは、なぜ迫害に遭うのかという理由を知る必要があった。
- ③「神の国」とは、地上に成就するメシア的王国のことである。
- ④メシア的王国が成就するまでは、多くの苦しみを通過する信者が多く出る。

3. 23節

Act 14:23 また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈って後、彼らをその信じていた主にゆだねた。

(1) 教会を組織化することによっても、彼らを励ました。

- ①ユダヤ教の会堂の組織をコピーし、それを教会に適用した。
- ②これは、実践神学的な慰めである。

(2) 長老たちを選び、断食をして祈った。

- ①長老は、信者になったばかりの者であってはならない(1テモ3:6)。

1Ti 3:6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。

- ②会堂で長老だった者たちが、教会の長老になったと思われる。

(3) 祈りの後、彼らを主に委ねた。

- ①自分にできることをしたなら、後は主に委ねるしかない。

(ILL) 対象的な2人の大伝道者

XI. パンフリヤのペルガ、アタリヤ (使 14 : 24~25)

1. 24~25 節

Act 14:24 ふたりはピシデヤを通過してパンフリヤに着き、

Act 14:25 ペルガでみことばを語ってから、アタリヤに下り、

(1) ピシデヤのアンテオケ経由で、パンフリヤのペルガに行った。

①前回の訪問では、伝道の記録がない。

②マルコの問題が出て来た (使 13 : 13)。

Act 13:13 パウロの一行は、パposから船出して、パンフリヤのペルガに渡った。ここでヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰った。

③今回は、「ペルガでみことばを語った」と書かれている。

(2) アタリヤはペルガに隣接する港町である。

XII. アンテオケ (使 14 : 26~28)

1. 26 節

Act 14:26 そこから船でアンテオケに帰った。そこは、彼らがいま成し遂げた働きのために、以前神の恵みにゆだねられて送り出された所であった。

(1) ペルガから船に乗って、アンテオケに帰った。

①なぜキプロス島に戻らなかったのかは、分からない。

*恐らく、永続性のある教会が誕生しなかったのであろう。

②アンテオケへの帰還は、紀元 49 年の秋頃であろう。約 1 年半が経過した。

2. 27~28 節

Act 14:27 そこに着くと、教会の人々を集め、神が彼らとともにいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったこととを報告した。

Act 14:28 そして、彼らはかなり長い期間を弟子たちとともに過ごした。

(1) 派遣教会に戻った彼らは、宣教報告会を開催した。

①神が彼らとともにいて行われたすべてのこと

②異邦人に信仰の門を開いてくださったこと

(2) 大きな変化

①リーダーがバルナバからパウロに変更になった。

②キリスト教の中心が、エルサレム教会からアンテオケ教会に移行し始めた。

*パウロとバルナバは、エルサレム教会には宣教報告を行っていない。

*エルサレム教会は、事態の変化にどのような姿勢を示すだろうか。

結論：第一次伝道旅行のまとめ

1. パウロの伝道のパターンが決まった。

- (1) 大きな町を訪問し、そこにあるユダヤ人の会堂に行く。
- (2) ユダヤ人と宗教的な異邦人（改宗者、神を恐れる異邦人）に語りかける。
- (3) 信じた人たちを宣教の基地として、広く異邦人世界に語りかける。

2. 神がともにいて御業を行われた。

- (1) パウロとバルナバは、神が用いる器である。
- (2) 伝道の主体は神である。
- (3) 主イエスの約束（マタ 28：20）

Mat 28:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

3. 伝道に続く弟子訓練の重要性が認識された。

- (1) パウロとバルナバは、危険を承知で、教会が誕生した町々を再度訪問した。
- (2) そこで、教理を教え、教会の組織化を実行した。

4. 教会の組織化が行われた。

- (1) 教会は、ユダヤ人の会堂の組織を真似て組織化された。
- (2) 長老たちが任命された。
 - ①牧師は、長老のひとりである。

5. 異邦人の救いが普遍的真理として認識された。

- (1) 異邦人は、恵みと信仰のみによって救われる。
- (2) この真理は、すべての町々で実証された。
- (3) イエスを主と信じる信仰は、異邦人世界に急速に広がり始めた。
- (4) ユダヤ人信者の中の律法主義者との衝突が予想される。

6. 試練の意味が説き明かされた。

- (1) 使 14：22

Act 14:22 弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない」と言った。

- (2) 「神の国」とは、地上に成就するメシア的王国のことである。
- (3) メシア的王国が成就するまでは、多くの苦しみを通ずる信者が多く出る。
- (4) この世の支配者は、神と神を信じる者たちに敵対する。
- (5) 苦難の経験は、信仰者の生活の一部である。
- (6) パウロ自身が、そのことを経験している。
- (7) 主イエスが警告を発しておられる（ヨハ 16 : 33）。

Joh 16:33 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」

7. 神は、ご自身のしもべたちが絶望しないように祝福を用意しておられる。

- (1) ルステラでの迫害とデルベでの祝福
- (2) ルステラで救われた者たちの中にテモテがいた。